「人生100年時代」は定着したが・・・

第一生命経済研究所　代表取締役副社長　佐久間 啓(さくま ひろし)

最近「人生100年時代」という言葉を耳にしたり目にしたりすることが増えた。今の時代を表すキーワードとしてすっかり定着した感がある。ロンドンビジネススクールのリンダ・グラットン、アンドリュー・スコット両教授が書いた『ライフ・シフト - 100年時代の人生戦略』(東洋経済新報社)が2016年10月に出版されると大きな話題となり、「人生100年時代」が今の時代を語る一つのキーワードになった。その後2017年9月に安倍政権の看板政策である人づくり革命推進に向けて首相をトップとした「人生100年時代構想会議」の議論がスタート、2017年末には「2017年ユーキャン新語・流行語大賞」にもノミネートされた。今や多くの新刊本の表題、帯等に使われ、新聞やTV、ネットの世界でも頻繁に見かけるようになった。

我々はこれまで日本の超高齢社会という「今の時代」を「高齢」という言葉以外でうまく表現することができていなかったように思う。おまけに超高齢社会を語るとき、これを誰がどれくらい負担していくのかという負担の再分配の問題として語られることが多く、明るい話題か少々憂鬱な話題かと言ったら後者の文脈で語られ議論されることが多かったように感じる。

そこにこの「人生100年時代」である。超高齢社会は多くの人が長生きする社会であり、若い世代にとってはこの先相当長い人生が待っている。当然不安はあると思うが、より長く生きる分多くの選択肢があるということだから今からいろいろ準備していく必要があるだろう。また、人生後半組にとっても定年、老後という単純なライフプランで一くくりにされるのでなく色々な顔を持ってアクティブに生きていける社会ということだろう。こうした「今の時代」に多くの人が感じている空気を的確に表現したのが「人生100年時代」という言葉であると思う。負担の再分配というような少々憂鬱な問題を思い出させる言葉より、人生を楽しむという前向きな響きが感じられることもあって急速に拡がり定着したのだろう。いや、それよりもどの年代向けにも使える便利なフレーズだからこそ定着したと言ったほうがいいのかもしれないが・・・。

ただ、当たり前だが今の時代を的確に表現できて何となくポジティブな響きのあるキーワードが定着したからと言ってまずは一安心、のはずはなく課題が解決するわけでもみんなが幸せになるわけでもない。例えば「人生100年時代」は価値観も多様化し、世帯主・夫・会社員、妻・無職、子供2人というような所謂モデル家計(家族)は更に減少し、個人の生き方、学び方、働き方にもいろいろなパターンがあること自体が普通になっていくと思われる。今の社会はそうした多様性に十分対応できる仕組みになっているだろうか。また、総人口・生産年齢人口の減少、日本人の平均年齢の上昇が続く中でいかに生産性を上げ成長を維持していくのか。社会の仕組みを変えるというと税制や規制の枠組みなど、いわゆる国の政策の問題だと考えがちだが民間部門、特に企業部門の役割も大きいように思う。ここはどちらが先にというよりこれまで同様密に連携しながら進めていける環境を維持したいところだ。いずれにせよ築き上げてきた人生75年?80年?時代の社会の仕組み、我々自身の考え方も変えていかなくてはいけない。ほっと一安心している余裕はない。

仕組みを変えるということではまさしく「革命」だ。革命に必要なのは覚悟とスピード。本当に革命が必要なときにそれが出来なければ多くの人がより苦労する。物騒な言い方かもしれないがこの「革命」は何としても成功させないといけない。